

学習者用「日本語機能語バンク」の構築

理論・対照研究領域 プラシャント・パルデシ 大久保 弥

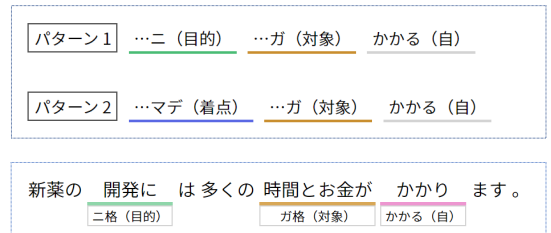
日本語機能語バンクとは

今年度からスタートした国立国語研究所共同研究プロジェクト『学習者用「日本語機能語バンク」の構築』では、約 1,200 の和語動詞の語義ごとの格助詞の組み合わせパターンとその用例を収録したデータベース「日本語てにをはバンク」と、約 2,000 の文型の意味、使い方、接続情報、用例などを収録したデータベース「日本語文型バンク」の構築を進めている。来年度からはユーザーインターフェースの開発に着手し、学習者の目線に立ったオンラインツールを提供する予定である。

日本語てにをはバンク

日本語には「～が～を」、「～が～に」、「～が～と」など、必須項を2つとる動詞や、「～が～から～を」など、必須項を3つとる動詞が多数存在する。また、同じ動詞であっても、語義が異なれば、必須項の数や種類に違いがある。動詞「上がる」を例にとれば、「花火が上がる」では一項目動詞（「～が」）として、「猫が屋根に上がる」では二項目動詞（「～が～に」）として、「知事の政策に県民から抗議の声があがった」では三項目動詞（「～に～から～が」）として使われる（以下、このような必須項の組み合わせを格パターンと呼ぶ）。母語話者は動詞の格パターンを自然に習得することができるが、学習者には習得が難しいとされる。一方の格助詞もそのほとんどが多様な意味をもち、例えば、格助詞「で」には、道具（「はさみで」）、手段（「英語で」）、場所（「東京で」）、範囲（「3分で」）などの意味がある。現状では、学習者が多様な格パターンとそこで使われている格助詞の用法を習得するには、数多くの例文に接して体得するほかない。

日本語てにをはバンクでは、動詞のそれぞれの語義においてどのような格パターンが使われるか、またそれぞれの格がどのような意味で用いられているかが、平易な例文とともに示される。右のイメージ図は、動詞「かかる」の語義「時間・お金・手間などが必要とされる」の格パターンとその用例を示している。インターフェースでは、格助詞の特定の意味（例えば、道具の「で」）を含む例文を横断的に検索できる機能も搭載する予定である。



日本語文型バンク

日本語には、「～なければならない」「～てもかまわない」のように実質的な意味が希薄化した表現がある。このような表現は「文型」と呼ばれ、構成する個々の単語の意味を組み合わせても、その文型がどのような意味や機能を持ち、どのような文脈で使用されるかを理解することはできない。そのため、文型を解説している辞書や参考書が不可欠になるが、海外では入手しにくいことが多く、世界の多くの学習者の手に届いていない実情がある。

日本語文型バンクでは、文型の意味や使い方、接続情報や用例などを調べることができるオンラインツールである。最終的に約 2,000 の文型を収録する予定である。すでに公開しているインターフェース（右図、<http://bunkeibank.ninjal.ac.jp/>）では、初中級の約 220 の文型が収録されている。今後は、データベースの質・量両面にわたる充実とインターフェースの操作性の向上を進めていく。

